ニボルマブによる非小細胞肺癌治療中に 急性尿細管間質性腎炎をきたした1例

宮迫貴正*1 内藤隆之*1 倉脇 壮*1 小田川誠治*1 清水優佳*1 小川貴彦*1 串田吉生*2 原 重雄*3 七井盛博*4 正木崇生*5

A case of acute tubulointerstitial nephritis during nivolumab therapy for non-small lung cancer

Kisho MIYASAKO^{*1}, Takayuki NAITO^{*1}, Soh KURAWAKI^{*1}, Seiji ODAGAWA^{*1}, Yuka SHIMIZU^{*1}, Takahiko OGAWA^{*1}, Yoshio KUSHIDA^{*2}, Shigeo HARA^{*3}, Shigehiro DOI^{*4}, and Takao MASAKI^{*5}

要旨

患 者:62 歳, 男性

主 訴:全身倦怠,食欲不振

現病歴: 201X-2 年 5 月肺原発低分化型腺癌 Stage IVと診断され、同年 7 月から放射線治療とともにカルボプラチン、パクリタキセル、ベバシズマブによる化学療法、同年 9 月からシスプラチン、ペメトレキセドによる治療を4 コース、201X-1 年 1 月からペメトレキセド単独による治療を計 1 年間継続した。しかしながら、治療抵抗性を示したため 201X 年 2 月からニボルマブを 2 週間ごとに投与した。4 回目投与時に血清クレアチニン値(S-Cr)が初回投与前の 1.76 mg/dL から 2.43 mg/dL へ上昇し、全身倦怠と食欲不振が出現した。5 回目投与前の血液検査で S-Cr 5.57 mg/dL とさらに上昇したためニボルマブ投与を中止し、腎機能低下の原因精査のため入院した。入院後、輸液を行ったが腎障害が改善しないため、第 7 病日に腎生検を施行した。光顕で急性尿細管間質性腎炎(acute tubulointerstitial nephritis:AIN)を認めたため、第 11 病日からメチルプレドニゾロン 1,000 mg を 3 日間点滴投与によるステロイドパルス療法を開始した。その後はプレドニゾロン 60 mg/日を投与し、S-Cr は 3 mg/dL 台へ漸減した。2 週間ごとに 10 mg プレドニゾロンを漸減し、第 44 病日退院した。その後も外来でプレドニゾロンを漸減し、201X+1 年 2 月、退院後 280 日が経過した時点でプレドニゾロン 10 mg/日を内服しながら S-Cr は 2.38 mg/dL で推移している。

ニボルマブによる肺癌治療中にAINによる急性腎障害をきたした1例を経験した。腎生検組織を検討することができた貴重な症例と考え報告する。

^{*1}Nephrology and Dialysis Division, Hiroshima Prefectural Hospital, Hiroshima,

^{*2}Department of Diagnostic Pathology, Faculty of Medicine, Kagawa University, Kagawa,

^{*3}Department of Diagnostic Pathology, Kobe University Graduate School of Medicine, Hyogo,

*4Department of Blood Purification,

^{*5}Department of Nephrology, Hiroshima University Hospital, Hiroshima, Japan

^{*1}県立広島病院腎臓内科,*2 香川大学医学部付属病院病理診断科・病理部,*3 神戸大学大学院医学部付属病院病理部・病理診断科,

^{*4} 広島大学病院透析内科,*5 同 腎臓内科

宮迫貴正 他 9 名 157

A 62-year-old man, who had been treated with 4 courses of biweekly nivolumab therapy for non-small cell lung cancer, was admitted to our hospital due to an increased level of serum creatinine (S-Cr) with symptoms of general fatigue and anorexia. S-Cr level rose from 1.76 mg/dL at the time of starting nivolumab therapy to 5.57 mg/dL. Renal biopsy and histology showed severe acute tubulointerstitial nephritis (AIN). The patient was treated with steroid pulse therapy and subsequent oral prednisolone at the dose of 60 mg/day for 14 days. Given that the S-Cr level gradually decreased, the oral administration of prednisolone was tapered. He was discharged on day 44 and the S-Cr level was 2.38 mg/dL while taking 10 mg/day of prednisolone at the time of writing. Although acute kidney injury during nivolumab therapy sometimes occurs, few reports have mentioned the histological findings. Some recent reports have described a close association between nivolumab therapy and the occurrence of AIN. To our knowledge, this is the first case report in Japan on a case of AIN during nivolumab therapy.

Jpn J Nephrol 2018; 60: 156-164.

Key words: immune checkpoint inhibitor, acute interstitial nephritis, nivolumab

緒言

わが国における2015年度死因順位別死亡数の第1位は悪性新生物で、同疾患による死亡数は増加の一途である¹⁾。 悪性新生物による死亡数のなかでも肺癌は男性で第1位、 女性で第2位で²⁾、治療効果の高い治療が望まれている。

従来,肺癌の治療は手術,放射線治療に加えシスプラチンを中心とする白金製剤を主体とした多剤併用化学療法が行われていた。白金製剤の抗腫瘍効果は評価を得て長年使用されてきたが,主に近位尿細管を障害することにより約1/3に急性腎障害(acute kidney injury: AKI)を合併することが想定されている³)。また,反復使用により AKI から不可逆的な腎障害に進行する懸念も存在し⁴,腎障害をきたさない抗腫瘍薬が望まれて久しい状況である。

そのような状況のなか、抗 programmed death receptor-1 (PD-1)抗体であるニボルマブが切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌に対する治療薬として承認された。ニボルマブは免疫チェックポイント阻害と呼ばれるユニークな作用で抗腫瘍効果を発揮する薬剤で、腎障害に関連した有害事象はこれまで少ないと考えられていた50。しかしながら、同薬による AKI の症例集積が近年海外から相次いで報告された^{6,70}。同薬はわが国において2014年7月に悪性メラノーマ、2015年12月に非小細胞肺癌、2016年8月に腎細胞癌に対して承認され、今後使用が増えることが予測される。2017年2月の時点で同薬と AKI に関連したわが国からの報告は、検索した限り学会抄録の3例、Letter による症例報告論文が1報80あるのみである。

今回われわれは、ニボルマブによる肺癌治療中に急性尿 細管間質性腎炎 (acute tubulointerstitial nephritis: AIN)によ る AKI をきたした 1 例を経験したので報告する。

症 例

患 者:62 歳, 男性

主 訴:全身倦怠,食欲不振

現病歴:201X-3年5月健診で肺気腫を指摘。胸部CTで 肺野の炎症性変化の所見を認め、経過観察されていた。 201X-2年5月鎖骨上窩のリンパ節腫大を認め、同年6月同 リンパ節を摘出した。同組織から肺原発低分化型腺癌の転 移を認め、CT および PET-CT を含む全身精査を施行した。 右前頭葉に脳転移も認め Stage IVと診断し、同年7月に放 射線治療とともにカルボプラチン,パクリタキセル、ベバ シズマブによる化学療法を開始した。翌8月に重度の多形 滲出性紅斑が出現したため、ステロイドパルスおよびガン マグロブリン大量療法を行い軽快した。その後同年9月か らシスプラチン、ペメトレキセドによる治療を4コースし た後に、血清クレアチニン値 (S-Cr) が投与前の 0.69 mg/dL から 0.91 mg/dL へ上昇,eGFR は 90 mL/分/ 1.73 m^2 から 66 $mL/分/1.73 m^2$ へ低下したため,201X-1 年 1 月からペメト レキセド単独で3週ごと18コース計1年間継続した。しか しながら、201X年1月新たに頸部リンパ節が腫脹し、同部 位の吸引細胞診で肺腺癌の転移を認めた。S-Cr は 1.76 mg/ dL, eGFR も 32 mL/分/1.73 m² とさらに低下したため、同 年2月からニボルマブを3 mg/kg で投与した。14日ごとの 投与を継続していたが、4回目投与時の血液検査で S-Cr が 2.43 mg/dL と上昇, eGFR は 22 mL/分/1.73 m² と低下を認め た。その後全身倦怠と食欲不振が出現し、5回目投与前の 血液検査で S-Cr は 5.57 mg/dL, eGFR は 10 mL/分/1.73 m² とさらに増悪したため、同薬の投与を中止するとともに腎 機能低下に対する精査加療目的で当院に入院した。

既往歴:小学生時に急性虫垂炎のため手術

家族歴:父;肝硬変, 肝癌, 母;特記事項なし, 弟;糖

		-	_		
Urinalysis		Blood cell count		Na	133 mEq/L
рН	5.5	WBC	8,200/ μ L	K	4.0 mEq/L
gravity	1.01	Neut	72.3%	CI	98 mEq/L
protein	(1+)	Lymph	n 16.2%	Ca	9.2 mg/dL
occult	(1+)	Mono	9.1%	Р	4.5 mg/dL
RBC	$1\sim$ 5/HF	Eos	2.3%	ALP	206 U/L
WBC	100/HF	Baso	0.1%	AST	18 U/L
Eosinophi	ils 1%	RBC	$3.75 \times 10^6 / \mu$ L	ALT	17 U/L
Bacteria	(-)	HGB	12.1 g/dL	LDH	209 U/L
U-TP/U-Cr 1.09 g/g · Cr		Hct	35.2%	CPK	47 U/L
U-NAG	10.5 U/L	PLT	27.2×10 ⁴ /μL	Glu	154 mg/dL
$U-\beta_2MG$	22,700 μg/L			HbA1c	6.3 %
FENa	4%	Blood chemistry		T-cho	163 mg/dL
FEUN	69%	TP	7.8 g/dL	Fe	32 μ g/dL
		Alb	3.5 g/dL	TIBC	238 μ g/dL
Blood gas analysis		BUN	54.0 mg/dL	Ferritin	584 ng/mL
рН	7.303	Cr	5.57 mg/dL	β_2 MG	11.5 mg/L
pCO_2	42.7 mmHg	UA	6.4 mg/dL	CRP	8.0 mg/dL
HCO ₃	20.5 mmol/L				

Table 1. Laboratory findings on admission

Table 2. Laboratory findings on admission (Immunology)

lgG 1	1,710 mg/dL	Anti SS-A antibody	<10 U/mL	
IgG4	76 mg/dL	Anti SS-B antibody	<10 U/mL	
IgA	285 mg/dL	HBs-Ag	(-)	
lgM	168 mg/dL	HBc-Ab	(-)	
C3	121 mg/dL	HBs-Ab	(-)	
CH50	60 U/mL	HCV-Ab	(-)	
ANA	40 Fold	RF	<15 IU/mL	
Anti ds-DNA antibody	<12 IU/mL	Cryoglobulin	(-)	
PR3-ANCA <3.5 U/mL		Immunoelectrophor	Immunoelectrophoresis	
MPO-ANCA	<3.5 U/mL	of urine	BJP(-)	
Anti GBM antibody	< 3.0 EU	of serum	M-bow(-)	
		ESR	62/71 mm	

尿病

生活歷:飲酒;機会飲酒, 喫煙歷;20本/日×40年

入院時現症:身長 160 cm, 体重 52.2 kg, 血圧 106/62 mmHg, 脈拍 84 回/分, 体温 $37.3 \,^{\circ}\text{C}$, $\text{SpO}_2 97\%$ (room air), 眼瞼結膜貧血なし,口腔内乾燥軽度あり,頸部リンパ節腫脹なし,両肺野呼吸音正常,心雑音聴取せず,腹部:軟,膨満なし,両下腿浮腫なし,体幹・四肢に皮疹なし

検査所見 (Table 1, 2): 検尿で尿蛋白,尿沈渣で白血球を多数認め,尿中 β_2 -ミクログロブリンは上昇していた。尿中好酸球は 1% であった。血液ガス分析では代謝性と呼吸性アシドーシスの混在を認めた。血液検査で S-Cr の上昇を認

めたが、高カリウム血症は認めなかった。各種自己抗体は 陰性で、血液疾患を示唆する所見は認められなかった。心 電図で有意所見なく、超音波検査および単純 CT で胸腹水 を認めず、両側腎臓は腫大していた。

腎生検組織所見 (Fig. 1): 12 個の糸球体が得られ、球状 硬化を 1 個認めたが、残りの糸球体に有意な変化を認めな かった。蛍光抗体法で糸球体に免疫グロブリンや補体の有 意な沈着を認めなかった。間質にはリンパ球、形質細胞を 主体とした高度の炎症細胞浸潤をびまん性に認めた。また、尿細管炎の所見が目立ち、部分的に尿細管基底膜の断 裂を伴っていた。一方では間質の好中球も目立ち、尿細管

宮迫貴正 他 9 名 159

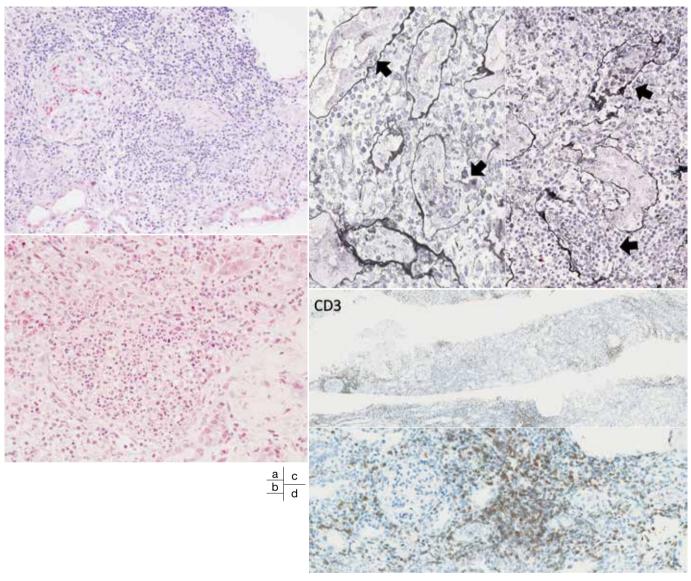
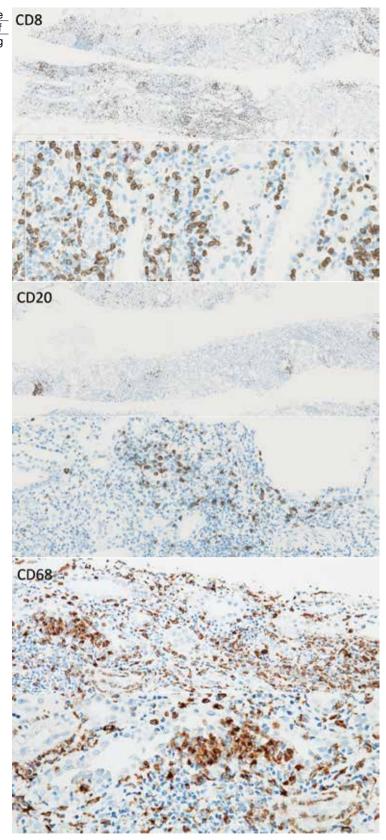


Fig. 1. Light microscopic findings in renal biopsy

- a: Biopsy specimen showed severe infiltration of lymphocytes and plasma cells along with some eosinophils. (Periodic acid Schiff stain)
- b: Tubulitis were observed accompanied with disruption of basement membranes. (Periodic acid methenamine silver stain)
- c: Neutrophil infiltrations were prominent, forming abscess-like massive infiltration. (Hematoxylin and eosin stain)
- d: Immunostaining showed CD3+ cells. (The upper is low-power field and the lower is high-power field.)

基底膜に沿った浸潤や,一部では膿瘍を思わせるきわめて高度の浸潤も認められた。好酸球はわずかであった。免疫染色では,間質における浸潤細胞の多くは CD3 陽性あるいは CD68 陽性であり,T リンパ球ならびにマクロファージが主体であった。CD20 陽性細胞 (B リンパ球)の分布は限局的であった。T リンパ球サブタイプは CD8 陽性細胞優位であった。血管炎は認められず,小葉間動脈では内膜の線維性肥厚を認めた。

入院後経過 (Fig. 2): Saline 2L を連日投与することにより尿量は確保できたが、S-Cr は改善しないため第 7 病日に腎生検を施行した。光顕で前述のように AIN の所見を認めたため、第 11 病日からメチルプレドニゾロン 1,000 mg 3 日間点滴投与によるステロイドパルス療法を開始し、その後はプレドニゾロン 60 mg/日を投与した。S-Cr は漸減し、3 mg/dL 台で推移したため、2 週間ごとに 10 mg プレドニゾロンを漸減した。全身倦怠や食欲不振も消失し、第 44 病日



 $\label{eq:Fig. 1. Light microscopic findings in renal biopsy} e \sim g : \mbox{Immunostaining showed CD8+ (e), CD20+ (f), CD68+ (g) cells.}$ (The upper is low-power field and the lower is high-power field.)

退院した。その後も外来でステロイドを漸減し、201X+1年2月退院後280日経過した時点で、プレドニゾロン10 mg/日を継続することによりS-Crは2.38 mg/dL前後で推移している。

老 察

免疫チェックポイントには細胞傷害性Tリン パ球抗原 4(cytotoxic T-lymphocyte-associated protein 4: CTLA-4)をはじめとするさまざまな細胞 表面に存在する膜蛋白や PD-1 などが関与してい る。癌細胞がPD-L1を発現すると活性化細胞傷害 性 T 細胞 (cytotoxic T-lymphocyte: CTL) 表面の PD-1 と結合し、CTL による細胞傷害が抑制され ることが知られていた⁹⁾。免疫チェックポイント 阻害薬はこの抑制を解除し、癌細胞の破壊、増殖 抑制を促す。同薬は細胞毒性がないため副作用が 少なく⁵⁾、特に腎障害をきたすことは少ないと認 識されていた¹⁰⁾。しかしながら、抗 CTLA-4 抗体 であるイピリムマブにより腎障害をきたした症 例が 2012 年初めて報告され11), 免疫チェックポ イント阻害薬においても AKI をきたしうること が報告された。同報告は腎生検がされておらず, どのような病態で腎障害が生じたのかは不明で あったが、近年 Cortazar らは免疫チェックポイン ト阻害薬使用中に AKI をきたし腎生検を行った 13 例の症例集積を報告した⁶⁾。12 例 (92%) に AIN を認め、免疫チェックポイント阻害薬と AIN の関 連性を指摘したが、抗 CTLA-4 抗体を使用した症 例が10例と多く, 抗PD-1 抗体の影響は不明で あった。その後、Shirali らがニボルマブ4例とペ ムブロリズマブ2例の計6例の症例集積を報告し $た^{7)}$ 。6 例すべてに AIN の所見を認め, 抗 PD-1 抗 体薬においても AIN と関連があることが確認さ れた。現在報告されている抗 CTLA-4 抗体のイピ リムマブと抗 PD-1 抗体のニボルマブ、ペムブロ リズマブによる腎障害に関する内容を Table 3 に 示す6,12~14)。

免疫チェックポイント阻害薬により AIN をきたす機序に関しては不明な点が多い。現時点では CTLA-4 や PD-1 は T 細胞の自己抗原に対する免疫寛容に寄与しており 15)、免疫チェックポイント阻害薬により self-reactive T 細胞が樹状細胞によ

宮迫貴正 他 9 名 161

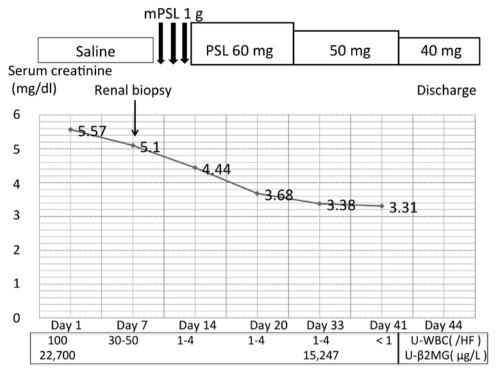


Fig. 2. Clinical course

Table 3. Renal toxities of each immune checkpoint inhibitors (ICIs)

	Ipilimumab (CTLA-4 antagonist)	Pembrolizumab (PD-1 inhibitor)	Nivolumab (PD-1 inhibitor)			
Adverse renal event and clinical features	Elevated serum creatinine and electrolyte disturbances Low grade (<1 g/day) or no proteinuria Microscopic hematuria is rare.					
Incidence of ICI- induced renal tox- icities	Overall incidence of AKI reported in 2016~2017 ranged widely from 2.2% to 29%, but probably increased along with widespread use of ICIs. Incidence of grade 3 or 4 AKI or need for dialysis was 0.6%. Combination therapy with these two drugs caused higher risk.					
	AKI: 2.0%, (0.9% presented Grade 3 ~4). Nephrotic syndrome and thrombotic microangiopathy rarely showed.	~4).	~4.)			
Onset after initiation of treatment	Mostly 6∼12 weeks (max 26 weeks)	3~12 months (later than Ipilimumab)				
Renal biopsy	Mostly tubulo-interstitial nephritis occurred, but in one patient, lupus nephritis-related nephrotic syndrome was reported. Ipilimumab only showed podocytopathy (membranous nephropathy and minimal change disease) and thrombotic microangiopathy.					

る抗原提示を認識することで、過剰な免疫反応が全身に生じ、皮膚、肺、大腸などさまざまな臓器に障害が生じると推測されている¹⁶⁾。また、全身の免疫過剰反応の一つとして AIN を起こすだけでなく、腎臓局所における PD-1/PD-L1 の関与も大変興味深い。マウスの尿細管上皮は PD-L1 を発現しており、同リガンドは CD8 陽性 CTL を介した cytolysis を抑制することが報告されている¹⁷⁾。さらにマウスだけでなくヒト尿細管上皮細胞においても PD-L1 は発現しており、サイトカインの産生を抑制することが報告されている¹⁸⁾。このことは、PD-1/PD-L1 が腎臓局所においても過剰な炎症反応が生じないように制御する一助を担っていることを示唆している。免疫チェックポイント阻害薬の投与により炎症細胞が過剰に反応して尿細管上皮細胞の障害、炎症の増幅を導くことが危惧されている^{7,19)}。

本症例の腎生検組織は間質の炎症細胞浸潤が主体であ り、尿細管破壊像も見られたことから、AINと診断した。 尿中 $β_2$ -ミクログロブリンならびに NAG 高値はこれを支持 する結果である。間質に浸潤しているリンパ球はCD8陽性 リンパ球が主体であり、CD68細胞も目立つことと併せ て, 既報と同様に細胞障害型の炎症反応の関与が示唆さ れた 6,19)。一方で、本症例は過去の報告と異なり好中球が 目立つ点が特徴的であった。特に好中球が尿細管周囲に配 列して分布する像や膿瘍を思わせるきわめて高度の細胞浸 潤は、ニボルマブによるものを含め、通常の薬剤性尿細管 間質性腎炎には見られない像である。本症例での特異な組 織像を説明する要因として, 多形滲出性紅斑の既往があげ られる。多形滲出性紅斑は薬剤やウイルス感染,マイコプ ラズマ感染などに伴って発症する全身性紅斑・水疱性疾 患であり、主として皮膚と粘膜に表皮壊死性病変を形成 する²⁰⁾。発症には特定のHLA抗原との関連が示唆されてお り、わが国の薬剤に起因する多形滲出性紅斑においては HLA-A*02:06, HLA-A*02:07, HLA-A*31:01, HLA-B*51:01, HLA-B*58:01 が関与することが報告されてい る²¹⁾。ニボルマブによる皮膚あるいは腎障害と特定のHLA 抗原の関連を明らかにした報告はなく、本症例でも HLA 抗原の精査はしていないが、何らかの遺伝的素因が背景に あり、ニボルマブによる尿細管間質性腎炎がより強く出現 した可能性が考えられる。

AIN の原因はさまざまであるが、薬剤性が 71%、感染関連 15%、特発性 8%、TINU 5%、サルコイドーシス 1% と薬剤性が多いことが知られている²²⁾。身体所見および入院時検査から感染症、サルコイドーシス、Sjögren 症候群を積極的に疑う所見は乏しく、眼科受診でブドウ膜炎を認めず

TINU 症候群も否定的であり、薬剤性の可能性が高いと推 測した。ニボルマブ以外の薬剤使用状況を確認したが, NSAIDs やビスホスホネート製剤は2年以上使用しておら ず、プロトンポンプ阻害薬は入院 573 日前に内服を中止し ていた。入院99日前にペメトレキセド単剤による化学療 法、入院77日前に左後頸部リンパ節の吸引細胞診をした際 に抗菌薬セフカペンピボキシルを3日間内服したが、それ 以外は総合ビタミン薬、チオトロピウム臭化物吸入を2年 以上継続している状況であった。市販薬、サプリメントは 摂取しておらず、民間療法もしていなかった。ペメトレキ セドによる AIN の可能性も懸念されたが、同薬による腎障 害は, 通常, 軽症で可逆性のことが多い。不可逆性の腎障 害を呈した症例の腎生検組織では、間質の浮腫と尿細管上 皮細胞の変性を認め急性尿細管壊死が示唆されるものの、 間質への炎症細胞浸潤は観察されていない²³⁾。セフカペン ピボキシル,総合ビタミン薬,チオトロピウム臭化物吸入 による AIN, あるいは特発性 AIN が偶発した可能性を完全 に否定することは困難であるが、入院57日前に投与された ニボルマブが本症例の AIN に関与した可能性を念頭に置 く必要はあると考える。興味深いことに、免疫チェックポ イント阻害薬による AKI は 2%程度と頻度は高くはないも のの, 投与後中央値 91 日で発症し⁶⁾, 抗 PD-1 抗体におい ては投与3カ月以降に発症するものが多いと報告されてい る⁷⁾。初回投与から数日後ではなく, 3 カ月程度経過した腎 機能変動が重要であり、このことは、腎臓内科医だけでは なく同薬の使用にかかわる全医療スタッフが周知しておく べきであると思われる。本症例はニボルマブ投与後2カ月 で発症しており、やや発症時期が早い印象であった。ニボ ルマブ投与前に S-Cr が 1.81 mg/dL, eGFR 32 mL/分/1.73 m² とすでに腎機能が低下し、それまでの化学療法、加齢や過 去の喫煙を基礎とした尿細管間質における組織障害、修復 過程における maladaptation が存在し、微小炎症状態が持続 していたことが影響した可能性があると考えるが²⁴⁾,症例 集積により発症時期の詳細が明らかになることが期待され

免疫チェックポイント阻害薬による AIN に対しては同薬の中止とステロイドパルス療法を含むプレドニゾロン換算 60~80 mg/日による初期治療が行われることが多い。これにより完全あるいは部分寛解する例が多く、末期腎不全に移行することは稀であると報告されているが^{6,7)},担癌患者は易感染性であり、高用量のステロイドを投与することに抵抗があることは否めない。抗 CTLA-4 抗体よりも抗PD-1 抗体により生じた AIN は治療反応性が良いことから、

宮迫貴正 他9名

0.5 mg/kg 程度のステロイド内服で治療が可能であるかどうか、今後の検討が待たれる。一方、抗 PD-1 抗体により AIN を生じた症例の大半は S-Cr 2 mg/dL 前後で検査および治療が行われており、薬剤の違いだけでなく治療のタイミングが適切であったことが良好な結果につながった可能性がある。本症例はニボルマブ投与前 S-Cr が 1.76 mg/dL,投与後 43 日に相当する 4 回目投与前に 2.43 mg/dL,投与後 57日に相当する入院時は 5.57 mg/dL まで上昇していた。ステロイドパルスおよび高用量プレドニゾロン内服により幸い部分寛解し、尿細管マーカーも低下を認め、201X+1 年 2 月退院後 280 日経過した時点で S-Cr 2.38 mg/dL を維持しているが、今後、ニボルマブ投与後に腎障害を呈した症例に遭遇した際に、可能な限り早期に腎生検を含めた精査加療を行うように努めるべきと考える。

腎障害が完全あるいは部分寛解した後の腫瘍に対する治療は今後の課題である。同種類あるいは別種類の免疫チェックポイント阻害薬を用いて再治療した症例が報告されている。再投与により腎障害が再燃した症例と再燃することなく経過した症例が混在しており、再投与すべきか否かは現時点で判断困難である^{6,7)}。わが国において現時点で使用できる免疫チェックポイント阻害薬は多くなく、ステロイド維持量を内服しながら再投与するか、他の化学療法を選択するしかない現状である。本症例は退院後約 100 日後に頸部リンパ節転移が再燃し、放射線療法とカルボプラチン 90 mg/回/週による治療を6コース行った。幸い腫瘍は縮小し、腎機能も保たれているが、今後、新たな免疫チェックポイント阻害薬や新規の抗腫瘍薬が望まれる。

結 語

ニボルマブによる非小細胞肺癌治療中にAINによるAKIをきたした1例を経験した。今後も多彩な機序を有する抗腫瘍薬が臨床使用されることが予想され、腎障害との関連を注視していく必要があることを体感する貴重な症例であり報告した。

謝辞

本稿の一部は第46回日本腎臓学会西部学術大会で発表した。

本稿執筆にあたり,ご助言および診療にご尽力頂いた県立広島病院呼吸器内科 石川暢久先生,濵井宏介先生にこの場をお借りして深謝致します。

利益相反自己申告:申告すべきものなし

文 献

- 1. 厚生労働省人口動態統計月報年計(概数)の概況. http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/dl/gaikyou27.pdf
- 2. 国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター年次推移. http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.
- 3. Arany I, Safirstein RL. Cisplatin nephrotoxicity. Semin Nephrol 2003; 23 (5): 460-464.
- Pabla N, Dong Z. Cisplatin nephrotoxicity: mechanisms and renoprotective strategies. Kidney Int 2008; 73 (9): 994-1007.
- 5. Borghaei H, Paz-Ares L, Horn L, Spigel DR, Steins M, Ready NE, Chow LQ, Vokes EE, Felip E, Holgado E, Barlesi F, Kohlhäufl M, Arrieta O, Burgio MA, Fayette J, Lena H, Poddubskaya E, Gerber DE, Gettinger SN, Rudin CM, Rizvi N, Crinò L, Blumenschein GR Jr, Antonia SJ, Dorange C, Harbison CT, Graf Finckenstein F, Brahmer JR. Nivolumab versus docetaxel in advanced nonsquamous non-small-cell lung cancer. N Engl J Med 2015; 373 (17): 1627-1639.
- Cortazar FB, Marrone KA, Troxell ML, Ralto KM, Hoenig MP, Brahmer JR, Le DT, Lipson EJ, Glezerman IG, Wolchok J, Cornell LD, Feldman P, Stokes MB, Zapata SA, Hodi FS, Ott PA, Yamashita M, Leaf DE. Clinicopathological features of acute kidney injury associated with immune checkpoint inhibitors. Kidney Int 2016; 90 (3): 638-647.
- 7. Shirali AC, Perazella MA, Gettinger S. Association of acute interstitial nephritis with programmed cell death 1 inhibitor therapy in lung cancer patients. Am J Kidney Dis 2016; 68 (2): 287-291.
- Tanaka A, Ikinaga K, Kiyohara E, Tanemura A, Wataya-Kaneda M, Fujimura R, Mizui M, Isaka Y, Katayama I. Critical renal adverse event induced by nivolumab therapy in a stage IV melanoma patient. J Dermatol 2016; 27. PMID: 27461931.
- 9. 滝口 裕一. 免疫療法. 日内会誌 2014; 103:1330-1336.
- Launay-Vacher V, Aapro M, De Castro G Jr, Cohen E, Deray G, Dooley M, Humphreys B, Lichtman S, Rey J, Scotté F, Wildiers H, Sprangers B. Renal effects of molecular targeted therapies in oncology: a review by the Cancer and the Kidney International Network (C-KIN). Ann Oncol 2015; 26: 1677-1684.
- Forde PM, Rock K, Wilson G, O'Byrne KJ. Ipilimumab-induced immune-related renal failure--a case report. Anticancer Res 2012; 32 (10): 4607-4608.
- Belliere J, Meyer N, Mazieres J, Ollier S, Boulinguez S, Delas A, Ribes D, Faguer S. Acute interstitial nephritis related to immune checkpoint inhibitors. Br J Cancer 2016; 115 (12): 1457-1461.
- Wanchoo R, Karam S, Uppal NN, Barta VS, Deray G, Devoe C, Launay-Vacher V, Jhaveri KD. Adverse renal effects of immune checkpoint inhibitors: a narrative review. Am J Nephrol 2017; 45 (2): 160-169.
- Escandon J, Peacock S, Trabolsi A, Thomas DB, Layka A, Lutzky J. Interstitial nephritis in melanoma patients secondary to PD-1 checkpoint inhibitor. J Immunother Cancer 2017; 5:3.
- 15. Francisco LM, Sage PT, Sharpe AH. The PD-1 pathway in toler-

- ance and autoimmunity. Immunol Rev 2010; 236: 219-242.
- 16. Voskens CJ, Goldinger SM, Loquai C, Robert C, Kaehler KC, Berking C, Bergmann T, Bockmeyer CL, Eigentler T, Fluck M, Garbe C, Gutzmer R, Grabbe S, Hauschild A, Hein R, Hundorfean G, Justich A, Keller U, Klein C, Mateus C, Mohr P, Paetzold S, Satzger I, Schadendorf D, Schlaeppi M, Schuler G, Schuler-Thurner B, Trefzer U, Ulrich J, Vaubel J, von Moos R, Weder P, Wilhelm T, Göppner D, Dummer R, Heinzerling LM. The price of tumor control: an analysis of rare side effects of anti-CTLA-4 therapy in metastatic melanoma from the ipilimumab network. PLoS One 2013; 8 (1): e53745.
- 17. Waeckerle-Men Y1, Starke A, Wüthrich RP. PD-L1 partially protects renal tubular epithelial cells from the attack of CD8+ cytotoxic T cells. Nephrol Dial Transplant 2007; 22: 1527-1536.
- 18. Ding HI, Wu X, Gao W. PD-L1 is expressed by human renal tubular epithelial cells and suppresses T cell cytokine synthesis. Clin Immunol 2005; 115: 184-191.

- Murakami N, Borges TJ1, Yamashita M, Riella LV. Severe acute interstitial nephritis after combination immune-checkpoint inhibitor therapy for metastatic melanoma. Clin Kidney J 2016; 9
 (3): 411-417.
- 20. Harr T, French LE. Toxic epidermal necrolysis and Stevens-Johnson syndrome. Orphanet J Rare Dis 2010; 16:5:39.
- 21. Kinoshita Y, Saeki H. A review of toxic epidermal necrolysis management in Japan. Allergol Int 2017; 66: 36-41.
- 22. Baker RJ1, Pusey CD. The changing profile of acute tubulointerstitial nephritis. Nephrol Dial Transplant 2004; 19:8-11.
- Rombolà G, Vaira F, Trezzi M, Chiappini N, Falqui V, Londrino F. Pemetrexed induced acute kidney injury in patients with non-small cell lung cancer: reversible and chronic renal damage. J Nephrol 2015; 28: 187-191.
- 24. Venkatachalam MA, Weinberg JM, Kriz W, Bidani AK. Failed tubule recovery, AKI-CKD transition, and kidney disease progression. J Am Soc Nephrol 2015; 26: 1765-1776.